
由紀子・夏樹編 改訂版

墮天王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

由紀子・夏樹編 改訂版

【Nコード】

N4462E

【作者名】

墮天王

【あらすじ】

記憶を失った青年、神山聡。リストバンドをくれた少年を探す、夏樹。自分の存在に疑問を感じている、由紀子。聡と夏樹。聡と由紀子。それぞれの出会いが、物語の始まりとなる。由紀子・夏樹編が、私的にも少し分かりにくかったので、少し話をまとめたり、加筆修正したものです。

第一話 面影の王子様

2005年 4月

櫻町の南側、櫻町商店街の外側の密集した住宅街に虹野印刷所にじのという、小さな印刷所がある。かつては結構繁盛していたが、人手不足と人材のチョイスに失敗し、いい感じに看板が傾いている。社長の虹野美津子は、いつも眉間を寄せ、帳面と向き合っていた。

「お母さん、学校行ってくるね！」

明るい笑顔を振り撒いているのは、娘の夏樹。母親の辛気臭さも、彼女の笑みの前では吹き飛んでしまう。

「おう、気をつけなよ。アンタまで先に逝ってしまったら、世界を恨んで魔王にでもなっちまうよ！」

「にやははは・・・お母さん、心配しすぎー」

貧乏は貧乏なりに。父親を早くに亡くした虹野一家は、それなりに幸せな毎日を送っていた。

夏樹の朝は、とても早い。町内を一周してから、学校に向かうからだ。母親の心配も、そこに起因している。それが分かっている。この日課を止めるわけにはいかない。彼女には、彼女なりの『走る』理由があるからだ。

夏樹は、左手首に古ぼけたリストバンドを付けている。七歳の時に、とある少年からもらった『足の速くなるお守り』である。その頃の彼女は、とても『ノロマ』だった。何をすることも動きが遅くて、他の子供からは『カメ』と評されるほどであった。その日も、彼女は他の子供たちに『カメ』と呼ばれ、からかわれていた。そこに現れたのが、リストバンドを付けた少年だった。

「もう泣くなよ。あ、そうだ！ このリストバンドをあげるからさ。足の速くなるお守りなんだぜ」

彼は、他の子供たちを追い払った後、リストバンドをくれた。少年の笑みとその優しさを、今でも夏樹は忘れる事ができない。リス

トバンドを付けて走っていれば、いつか彼に会うことが出来るのではないか。それが、彼女の『走る』理由である。

中学生の時から陸上部に所属し、高校生になってからも陸上部を続けた。もともと才能があつたため、夏樹は多くの賞を取り、現在も期待のエースである。しかし、少年とはあれから一度も出会えていなかった。

いつも通りに町内を一周して、いつも通りに大木公園の中央に聳え立つ守り木の下ベンチで一休みを取る。

四月もまだ中旬。風がとても心地よく、春の匂いを感じる。夏樹は、大きく伸びをして、心行くまで一休みを堪能していた。

「もう高校二年生か。もうあの人には会えないのかな。はあ・・・もう会っても、分かんないよね。十年も過ぎちゃったし」

少年が何歳だったのかは、記憶もおぼろげになっているからはっきりしない。それでも、十年も経てばかなり相手の容姿も変わっていることだろう。正直、最近ほとんど自信がなくなりつつあつた。そんな折である。公園の中央に一人の青年がやってきていた。その青年は、近くにあつた空き缶をやけくそ気味に蹴飛ばした。空を飛ぶ空き缶。クルクルと回転し、それは――夏樹の頭に直撃した。

「あだっ！」

妙な奇声を上げ、頭を抱えてうずくまる夏樹。スチール缶の硬さは、半端ない。痛くないはずがなかった。さすがに缶を蹴った青年も焦った様子。慌てて駆け寄ってきた。

「うわあー！ すまねえー！ー！！ 大丈夫か？ 救急車呼ぶか？ その前に止血か？！」

「なんてことするのよ！ 頭がカチ割れるかと思ったよ！」

夏樹は、慌てる青年をきつと睨み付けた。髪を刈り上げた、随分と立派な体つきの青年である。青年が慌てふためく姿は、どこか滑稽でもあつた。だからといって、許すわけにはいかない。断じて。

「ねえ！ 普通、周り見るよね？！ 考えなしに、空き缶とか蹴らないでくれるかな！ すんごい、気分悪いんだけど！ おじさん、

謝つてすむならね、警察なんかいらないのよ、この馬鹿！」

「まったくその通りだな。本当にゴメンな。ちとイライラしてて」
「言えば言うほど、シヨボーンとしていく青年。怒っているうちに、夏樹もなんだかあんまり言うのも可哀想かな？　と思えてくるほどであつた。」

「たんこぶ出来なかつたか？　本当にゴメン」

「・・・もういいよ。今度から気をつけてよね。私みたいに、寛大な人ばかりじゃないんだから」

言うだけのことは言つたので、夏樹は早々にその場を後にした。

その次の日のことである。

いつもの日課を終えて大木公園へと来ると、昨日の青年がベンチに座っていた。驚く夏樹に、青年は気軽な様子で『おはよう！』と声をかけてきた。

「昨日は本当に悪かつたな。あ、これあげる」

良く冷えた、スポーツドリンクの500mlのペットボトルを手渡される。ひとつ走り終えたところで、これは嬉しい。夏樹は、快く受け取つた。

「ありがとう。昨日の事は、本当に良く反省してよね。すんごい、痛かつたんだから」

「反省しております。猛省しております」

深々と頭を下げる青年。どことなく憎めない人である。彼に対しての怒りは、いつのまにか消失していた。

「おじさんは、何かスポーツでもしているの？」

青年の隣に座って、スポーツドリンクを飲みながら、彼と雑談する。座るといっても、青年がほぼ真ん中に座っているのに対して、夏樹はベンチの端である。

「うゝん、分かん」

青年は困っていた。

「分かん？」

夏樹も困って、そのままオウム返し。

「・・・分からないんだ」

青年はただそう繰り返した。その表情は、冗談を言っているようにはまるで見えなかった。なにかしらの事情があるのだろう。夏樹もそれ以上は聞かなかった。

「そういう・・・えと、名前、聞いていいかな。俺は、神山聡」

「虹野夏樹だよ」

「虹野さんは、なんのスポーツをしているの？」

「陸上の短距離」

「へえー、短距離か」

青年——神山聡は、どこか嬉しそうに立ち上がった。

「なんだか、懐かしいな。なあ、俺と競争しないか？」

「へっ？ 言つとくけど、私、滅茶苦茶速いよ。勝負にならないと思っただけど」

相手が成人男性であろうが、夏樹は負ける気などさらさらなかった。それだけ、短距離には自信があった。

「それでもいい。なんだか、今無性に走りたいんだ！」

拳を握って、熱血な聡。そこまで言われると、断るのも可愛そうだと、夏樹は彼に付き合うことにした。

場所は、そのまま大木公園。中央から外の大通りまで伸びる道は、長さ100m前後。丁度いい長さなのである。

「位置について・・・」

夏樹が掛け声をかけることになった。聡は、軽く腰を沈める。夏樹も彼に合わせて、少しだけ腰を沈めた。わざわざ、正式のスターティングポーズはとる必要もないと判断したのだ。

「よいい、どん！」

夏樹が少し早く出た。軽やかにそして力強く大地を蹴り上げ、夏樹の体が加速していく。いつも通りの走り。手加減は最初からするつもりはなかった。引き離されていくであろう聡の姿を見るために、後ろを振り返ろうとしたその時、目の前を聡が走り抜けていった。

「えっ？」

驚いている間に、グングンと引き離される。慌ててスピードを上げようとかがくが、距離はただただ離されるばかり。その後姿が、夏樹には一瞬リストバンドをくれた少年の姿と被って見えていた。結局夏樹は、圧倒的な差をつけられて敗北してしまった。

「うそっ……」

肩で息をしている夏樹には、それしか言葉にならなかった。聡のほうは、もうすっかり息を整えている。体力も彼の方が桁違いに上のようなのである。

「よっしゃ、大勝利！ やっぱ、間違ってたぜ」

彼が何を言っているのか、やっぱり分からない所がある。だが、今はそれどころではない。夏樹は、意を決めて、彼にリストバンドを見せた。

「ねえ、このリストバンドに覚えがない？」

願うように、夏樹は言葉を紡ぐ。『yes』と言って欲しい。そんな彼女の思いは――。

「ん……悪い。今、分からないわ」

叶わなかった。知らないではなく、分からないであつたが、彼女にとっては同じ意味も当然だった。

「そっか。せつかく会えたと思ったのに……」

悲しかったが、夏樹はすぐに気持ちを切り替えた。

「なんでもない！ それにしても、神山さん、足速すぎ！ なにが分からない、だよ。いい感じに、騙された！ 責任取れ！」

「またジューズ買ってきてやつから、そんなに怒るなよ」

「物で釣ろうとしている！ 大人ってズルイんだ！」

口でそう言いながらも、夏樹はとても楽しそうに笑っていた。

第二話 記憶の果ての知らない人

????年 某所――

闇の中に、ぼうと灯った赤色の光。せきしよく情熱を意味する色にも関わらず、それは何よりも冷たく見え、まるでたれ流れる血液のようであった。その瞳に映る一人の男の姿。右腕が欠落したその男は、血が零れ落ちている断面を押さえ、表情を怒りでゆがめていた。

「わ、私の腕が・・・！」

むせ返るような血の匂いが漂っている。瞳だけではなく、着ている物まで赤色に染めあげられている彼女は、後ろで震えている少年の方にゆっくりと体の向きを変えた。

少年に、彼女は優しく笑いかける。その瞳は、先ほどと違って暖かさを伴っていた。座り込んでいる彼の前で膝を折り、視線の高さを合わせ、そして――。

「ごめんなさい。こんな事に巻き込んでしまつて。あなたは、あなたの日常に・・・戻つて。もう思い出してはダメ。一生・・・忘れたままでいて」

「お、俺は・・・！」

言葉を紡ごうとした彼の前で、彼女は両手をぱつと交差させた。

少年の瞳から光が奪われ、その光を失った瞳を静かに閉じ倒れた。彼女はそれを見届けた後、立ち上がつてずっと傍に立っていた少女の方に顔を向けた。

「彼をよろしくお願いします」

少女が何か言葉を発した。だが、再び冷たい赤色の瞳に戻った彼女の耳には、届かなかった。いつのまにかいなくなっていた右手を失った男を追うために、彼女は深い森へと駆け込んでいった。

2005年 4月

水が流れる音が、朝の静けさを奪う。洗面台に掴まり、由紀子ゆきねは

前かがみになっていた。

顔を上げる。鏡に映る姿は、いつになく冴えていない。彼女は自分の不健康な青白い顔を眺め、深いため息をついた。別に、自分の顔や健康状態に不満があったわけではない。

夢——幼い頃から時折見る、不思議な夢。それは楽しくも切ない夢であることもあるが、大半は吐き気を催すほど、気持ち悪いものである。だが、どんな嫌な夢でも目が覚めてしまえば、消え去ってしまう。だからといって、不快感まで消えるわけではなかった。

夢を見た後、彼女はいつもこう思う。

自分は誰なのか——と。自分は、本当はこの世界にいてはいけない人間なのではないか——と。だから、夢を見たその日一日はとても気が重い。

「由紀子、遅刻するぞ」

唐突な呼び声に、由紀子はビクツと体を硬直させ、すかさず瞳を細め声の主を睨みつけた。

「うるさいわね……!」

由紀子の剣幕などどこ吹く風といった風貌の相手は、今年二十六歳になる由紀子の兄、小泉章吾^{ちゅうみづ しょうご}。男であるが髪を長く伸ばしており、それを首筋で結んでいる。優しい瞳とあいまって、どこか中世的な容姿の持ち主であった。

「だいたい、まだ七時半よ。遅刻するわけじゃないじゃない」

時計を確認しながら、言う。由紀子は、課外を受けていないため、八時半までに校門を潜り抜けていればOKなのだ。ちなみにいつもは八時十五分くらいに起き、バタバタと学校まで走って行っているおかげで、遅刻の回数は凄い事になっていた。

「もう七時半だ」

由紀子が鏡に向かったのは、七時ごろだった。彼に言われなければ、三十分経っていることに気づかなかっただろう。それを理解したからといって、由紀子が態度を変えることはなかった。

章吾の横を無言で通る。章吾は、そんな由紀子に敢えて言葉はか

けなかった。

居間に行くと、母親の透子が朝食を作っていた。彼女もまた長い髪を有しているのだが、彼女の場合はその髪を幾重にも後ろで重ね、巻きつけているので、解いた時どれだけの長さになるのかは、正直分らない。彼女がその髪を由紀子の前で解いた事は、一度もなかった。時代錯誤も甚だしい割烹着はなはを着た透子は、鼻歌交じりでフライパンを転がしていた。

「おはよう」

由紀子の挨拶で、ようやっとその存在を認知。

「今日は早いね」

母親の言葉は無視する。いつものことなので透子は気にしていなかった。透子がつ作ってくれた朝食を食べているうちに章吾が合流し、片づけを一段落させた透子が最後に合流する。小泉家は、これで全員だ。父親は、ずっと昔に亡くなっている。由紀子が覚えているのは、父親の大きな手のひらと頭を撫でもらう感触だけ。棚の上においてある写真で顔は分かるが、それを見ても懐かしさはあまりなかった。

静かな朝食を終え、由紀子はいつもより早いが学校に向かった。家を出るとまず坂を降り、大通りを渡り、そして大木公園の中へ。この公園を通れば、わずかであるが近道になるし、同時にさわさと優しく囁きかけてくる若葉の音が心地よい。夜はいい噂のないこの公園であるが、太陽が出ている間は本当に美しい公園なのだ。

守り木のある中央部に差し掛かる。

由紀子は一旦足を止め、その守り木に視線を送り——そこで木の前に青年が一人立っていることに気づいた。大きな背中を由紀子の方に見せ、木を仰いでいる。この木は櫻町の伝説であり、名物であり、愛されている木だ。こうやって守り木を見上げている町の人がいっても、なんら不思議な事ではない。むしろ、それは日常的な光景の一つである。

由紀子も気にすることなく、守り木を左から迂回。そして何気な

く青年の方に、もう一度視線を巡らせた。途端、青年も由紀子のほうに顔を向け、視線がぶつかり合った。由紀子の意識は、それと同時に眩んだ。

視界が開けると、木々に囲まれた小さな空が見えた。

「茜」

そう呼ばれて振り向くと、そこには少年が穏やかな顔で立っていた。

「またこれたみたいだ」

「・・・聡さんは、不思議な力を持っているのかもしれないね」

「そうなのか？ これ以上ないというくらい平凡な人間なんだけだな」

「そうですね。私から見ても、そう見えます」

「だろう」

少年が笑う。それを見ていると、とても心が穏やかになった。

ふと気づくと、由紀子の視界には白いパネルが映っていた。公園に敷かれている、薄汚れたパネルだ。そのパネルに点々と跡を残している染み。それが、自分の涙であることに気付くのに、結構な時間を要した。

正体不明の感情が、由紀子を苛む。^{さいな}由紀子は、唐突に怖くなった。自分の存在が、おぼろげに感じる。このままここには、何か大切なものが欠けてしまう。唐突な危惧。由紀子は、涙を拭う事もせずその場から走り去った。

走って、走って。途中で転んで。それから、流れ続ける涙を拭いながらひたすらに歩いた。そうしてたどり着いた場所が、櫻町の西方に位置する防波堤だった。櫻駅の裏側にあるこの場所は、休みの日であれば釣りをする人が幾ばくかはいるが、平日ではよっぽどの事がない限り、人は来ない。

ここは由紀子が泣きたい時や、悩み事がある時に来る聖地だった。まだ四月の下旬。風は冷たい。穏やかな海の音。ささやかなる太陽の恵み。潮の香り。時折遠くで聞こえるディーゼル車の排気音。

それらの音が優しく由紀子を包み込み、彼女に穏やかさを運ぶ。

由紀子は膝を抱え、顔を埋めていた。まだ心が疼いている。震えまで出てきていた。そして、涙もまだ止まっていなかった。

しばらくそうやって考えていた。由紀子が垣間見たあの光景は、いつも見ている夢に良く似ていた。気持ち悪い夢の方ではなく、楽しくも切ない夢のほうに。いつもと違う点は、いつもならすぐに忘れてしまうのに、今でも鮮明に思い出せることだ。

「茜・・・なんで私が茜なんて呼ばれているの・・・？」

少年は確かに『茜』と呼んだ。『ユキネ』ではなく、『アカネ』と。

「・・・由紀子さん？」

唐突な声にびくつと反応したものの、その声が聞き覚えのあるものだったので、由紀子は僅かに顔を上げた。しかし、声がした方に振り返ろうとはしなかった。

「どうしてこんな時に・・・」

由紀子の後ろにいつの間にか立っていた少女が、その顔を僅かに曇らせる。美しい切れ長の瞳に、強い輝きをまとう黒い双眸そうぼう。同じく黒い髪を首筋辺りで結んだ、ほっそりとした典型的な日本人。なぜか彼女は巫女装束をまとっており、背に緑色の唐草模様の袋に包まれた長い棒のようなものを背負っていた。

浮世離れた存在。まるで1000年前の物語から抜き出てきたような彼女の名前は、橘椿たちばな。由紀子にとって、二番目に古い友である。

「どうされたんですか？」

「別に」

由紀子は、素っ気無くそう答えた。すると椿は、きっと由紀子の背を睨み付けた。

「由紀子さん！！」

その一喝は、この広い空間であってもよく響いた。由紀子はまた泣きそうな顔になって、それを隠すように顔を埋めた。

「・・・一人で悩まないで。私を・・・困らせないで。そんな風にされると、私は不安です。私は、由紀子さんの親友ではなかったのですか？」

椿の言葉が辛い。そこまで言われたら、由紀子も流石に『NO』とは言えなかった。

「・・・さつき変な奴に会ってね」

由紀子はそう切り出し、椿に先ほどの事を全て話した。椿は、驚いていた。そして話を聞いているうちに段々と、辛そうにしていくな。由紀子が話し終えた後、椿はしばらく言葉を紡ぐ事ができなかった。彼女の中で、色々な思いが渦巻いているのだらう。左の手首を握っている右手の力が、ぎゅっと強まる。

「由紀子さんは、由紀子さんですよ」

椿は微笑んだ。それはあまり上手な微笑ではなかった。

「なら、私が見たのはなんなのよ」

「それはきつと前世の記憶ですよ」

「前世？」

由紀子は、少しだけ顔を上げた。

「輪廻転生は、事実です。強き思いを叶えられずに死んだ人間は、記憶を捨てる事が出来ずにこの世界に戻ってくる事がああるんですよ」

そこでわざとらしく、咳払いを一つ。

「かくいう私も、安土桃山時代に最強の名をほしいままにした橘家の椿の転生体・・・と言われているんですよ」

「え？ 本当のことなの？」

由紀子は驚き、椿の方を見た。ようやくと彼女がこっちを向いてくれたことに嬉しさを感じ、椿はいつにも増して語る。

「でも、私には前世の記憶はありません」

椿は、広い海原に視線を移す。風が、優しく彼女の髪を撫でていた。

「お爺様が言われるには、前世の私が記憶を封じているそうです。」

人は、現世の事で精一杯。前世の事に縛られていては、不幸になるだけ・・・私はそう教えられました」

どことなく寂しげに瞳を細めた彼女であつたが、由紀子の方に視線を戻した時には、そんな面影は微塵も残っていなかった。

「由紀子さんは、由紀子さんです。私の・・・こんな私の大切な親友。ひねくれ者で、オカルトを愛し、根暗で眼鏡で、遅刻と赤点数は優等生」

「一言も二言も多いわよ」

由紀子はそう言いながらも、うつすらと笑みを浮かべていた。椿の言葉は、由紀子に確証を与えた。わだかまっていた不安が。積み溜まつていた思いが。緩やかに氷解していく。もう由紀子は、泣いていなかった。

「・・・顔を洗って、学校に行くかな」

由紀子は立ち上がり、ちよつと苦笑い。

「完全に遅刻だけだね」

そして、由紀子も海原を見つめた。

「まあ、夏樹をからかってウサ晴らしでもするよ」

椿の方に向き直った彼女の表情は、実に晴れ晴れとしており、彼女らしい笑みがそこに現れていた。

「夏樹さんですか」

「夏樹も会いたがつていたよ。今度、一緒に喫茶店でも行こう。白玉パフェ、奢つてあげるから」

「白玉パフェ・・・委細承知しました」

なぜか真面目にそう答える椿がおかしく、由紀子は笑いを必死にこらえる。素直に笑つたりしたら、海にけり落とされかねない。椿とはそういう女なのだ。

「じゃ、夏樹に話しておくから。決まったら電話するね」

椿の横を通り過ぎ、由紀子は学校を目指す。その前に由紀子は一旦止まり、椿に振り返りこう言った。

「ありがとね」

椿は笑みを浮かべ、そんな由紀子に手を振りつつ、見送った。

由紀子の姿が見えなくなる。すると椿の顔が、途端に翳った。携帯を取り出し、コール。

しばらくして。

『どうした？』

と野太い声が聞こえてきた。

「赤鬼せつきの件についてのご報告があります」

『赤鬼だと？』

「詳しいことは後ほどご報告いたします。調べたいことがありますので、小泉家の依頼をキャンセルしていただけないでしょうか？」

『分かった。小泉家の当主にも話を通しておく……迂闊に動くなよ』

「分かっております」

携帯を切った椿は、瞳を細めて海を睥睨へいげいする。

「……由紀子さんの記憶に現れた男の名は、聡。危険人物の名前は一通り覚えたはずですが……」

椿の言葉は、海のささやきに静かに取り込まれていった。

それから数日経った日の夕方のこと。由紀子は、いつも通り大木公園を通って帰宅していた。守り木の横を通り過ぎようとした時、その下のベンチに件の青年くたんの姿があった。思わず足を止めてしまった由紀子。青年も、由紀子の気配に気付いたらしく、振り向いた。

「あつ、君は……良かった、また会えた」

青年は、安堵していた。その理由が、由紀子には分からなかった。瞳が合うが、今度はこの前のような急激な眩みはなかった。

「少し、話を伺っても構わない？ 聞きたいことがあるんだ」

「……別に構いません」

男の人に声をかけられ、由紀子は非常に緊張していた。嫌悪感があるとかそういうのではなく、純粹に男性と話すのが苦手なだけで

ある。

「俺のこと、なんでもいいんだ。知っているなら、教えて欲しい。何を言っているのか。由紀子は、『はっ?』と言葉にはしなかったが、表情でそう表した。青年は、困った風に頭を掻いていた。

「・・・信じてもらえないかもしれないが、俺、実は記憶がなくてさ。覚えていたのは名前ぐらいなもので、それ以外は全く。だから、ずっと俺のことを知っている奴を探してきてさ。この町には、覚えがあつて・・・ここになら、俺のこと、知っているやつがいるんじゃないか。そう思つてさ。君は・・・茜さんだっけ?」

由紀子は、すぐに頭を横に振った。

「いいえ。私の名前は、小泉由紀子です」

青年の目が点となる。そして、急に頬を染めて、慌てふためいた。「あ・・・俺、もしかして軽く人間違いしてた? うわぁー! わりいー! 忘れてくれ、今の話! めちゃ、恥ずかしいわ。どないしよう。あはは、気にしないでくれ。こんな事もあるさ。ははははは」

やけくそになっている。そんな彼の姿が滑稽で、由紀子も思わず笑っていた。

「記憶喪失・・・なんですね。私、初めて見ました」

「そうだろう! 記憶喪失の人間なんて、レアだもんな。凄いだろう」

「凄いかどうかは・・・」

苦笑する由紀子。それは威張る所なのだろうか。

「私、オカルトとか好きで、大変興味深いです。あ・・・」

そこで、由紀子は失言に気付いた。相手の深刻な悩みを、『興味深い』と言ってしまったためである。だが、青年は特に気にした様子もなく笑っていた。懐が大きいのか、あまり物事に頓着しない性格なのか。

「ごめんなさい、私・・・興味深いか・・・」

「いいんだよ。実際、俺自身もそう思っているしな。なぜ、記憶を

失ってしまったのか。分からないが、なんとなく……なんとなくだが、記憶を失ってしまった事には意味があるんじゃないか、そう思っているんだ。だから、俺は記憶を必死に探している。早く、記憶を探して、答えを見つけなければ、俺はきつと後悔することになる。そんな焦燥感が、いつもあるんだ。変な話だろう？　でも、妙に焦るんだよな。本当に」

記憶喪失。いわゆる、『健忘』と呼ばれる現象である。由紀子の知識にも、そのことはあった。

「記憶喪失には、心因性、外傷性、あとは薬物とか病気とかが原因で起こるもので、名前を覚えていて、昔の事を思い出せないなら、逆行性の部分健忘だと思います。一度、ちゃんとした病院にかかった方がいいと思います」

青年は、再び驚いていた。

「君、凄いな。えらく、物知りじゃないか」

「そ、そんなことないです」

由紀子は、照れて思わず頬を掻く。人に素直に賞賛されるのは、彼女にとっては滅多にないことであった。

「でも、病院はダメなんだ。病院には、近づいたらいけない。なぜか、そう思えて仕方ないんだよ。だから、自力で何とかするしかないかってね」

暗示でもかけられているのか、それとも記憶を失う以前のなにかしらのこだわりなのか。彼の記憶喪失には、色々と制限がある様子である。

「今日は、色々とうな。楽しかった。また、ここ通るんだろっ？」

「通学路ですから」

「よし、またここで待ち伏せしているからさ、その時は付き合ってくれないか？　まだ、知り合いが二人しかいないくてさ」

「私で良ければ……」

青年の事は、嫌いではなかった。それどころか、話をすれば話を

するほど、どこか懐かしい思いに駆られていた。ずっと、ずっと昔——彼と、こうやって話していたような、そんな錯覚さえ感じていた。

「よっしゃ！　じゃ、俺、そろそろ帰るわ。煩い奴がいるからさ。またな！」

青年は、慌しく走って帰っていった。由紀子は、その背中に手を振って見送る。彼を見送っている時、とても寂しいと感じた。なぜ、そう思ったのは分からなかったが、また会えるそう思うと、堪らなく嬉しかった。由紀子は、その時気付いてはいなかった。頬を流れる、一滴の涙の存在に——。

第三話 聡への疑念

2005年 4月

椿は、オフタートルTシャツと黒いロングスカートという服装に身を包み、鏡の前でクルクルと回る。今日は、由紀子たちとお出かけする日。生活のほとんどを着物で過ごしている彼女であるが、友達と過ごすときは目立たないように洋服を着る。ずばらな由紀子に比べれば、彼女の方がずっとお洒落であった。

「こんなものでしょうか」

すでに用意しておいた黒い手提げのバックを持って、椿は廊下へと出た。するとちょうど妹の櫻が廊下を歩いていた。椿に気づいた櫻は、軽く会釈をする。

「お出かけですか、椿姉さま」

いまだき珍しいポニーテールの櫻。服装は、薄い桜色の着物である。感情の薄い細い瞳に、痩せすぎた顔。その姿は、痩せた犬を連想させた。

「ええ、友達と」

気恥ずかしそうにしている椿。滅多に洋服を着ないため、どうしても恥ずかしいのである。しかし対する櫻はというと、凍てついた表情をピクリとも動かしてはいなかった。

「お気をつけて行ってらっしゃいませ」

ペコリと頭を下げ、横を通り過ぎていく。椿は何か声をかけようとしたが、結局何も言うことはできなかった。

時刻を確認する。そこで椿は眉根を細めた。現在時刻は、十一時五十分。部屋に戻って目覚まし時計の時刻を確認してみる。そっちは十一時半で——秒針が止まっていた。

「ちよつとなんで止まっているんですか、このボケ時計！」

椿は、慌てて家を出て行った。

待ち合わせ場所は、櫻駅の前。走った所で間に合う距離ではない

が、彼女はかまわず走る。折角セットした髪が乱れる事を気にしながらも、まっしぐらに駅に向かうのであった。

時刻は、十二時七分。椿は、駅前に立っている夏樹を見つけ、全力で走り寄る。夏樹も気づいてそんな椿に手を振ったが、彼女にそんな余裕はなかった。そのまま走り寄り、夏樹の肩をガシツと掴んだ。

「お、遅れて申し訳ありません!!」

「いいいいいい、OK、OK! とりあえず落ち着こうよ椿ちゃん」
ガクガクと揺さぶられる、哀れな夏樹。椿は姿身はか細いが、その腕力とはんでもない。揺さぶられすぎると激しく危険であることを、夏樹もよく知っていた。

「時計が故障してしまって・・・申し訳ありません」

「いいいいいいよ。それに・・・椿ちゃんに悪いけど・・・」

夏樹は周りを見渡す。日曜日である事もあって、人も車も割かし通っている。しかし、そこには彼女が探している者達の姿は見当たらなかった。

「・・・夏樹さん」

椿も様子がおかしい事に気付いたようだ。彼女も、周りを同じく見渡す。だが、彼女の瞳にも夏樹と同じものしか映らなかった。

「後の二人はどうされたんですか？」

「それが・・・」

夏樹は、少し言葉を濁らす。だが、もう誤魔化す事も出来ないの
で、できるだけ明るく椿に告げた。

「十分前からここににいるけど、だ～～～～れもこないんだなあ!

あはははは!!」

夏樹の笑い声が、虚しく響き渡る。椿は、いまだに夏樹の洋服を掴んでいる。だから分かった。その握力が、瞬間的に増した事に。

「この私が・・・どんな思いで・・・」

「ゆ、ユツキーが遅刻するなんて、ほら・・・ね?」

「夏樹さん」

椿の声は、まるで井戸の底から這い上がってくる地獄からの怨嗟えんさの声のよう。夏樹の顔も、真っ青に。

「そ、そうだよ。遅刻なんて、悪い事だよ。にやははは・・・」
最後の方は、もうほとんどかすれていた。

「迎えに行ってくださいね」

椿が浮かべた笑みは、あまりにも完璧すぎた。彼女は、普段あまり笑わない。そんな彼女が笑うときは、大抵怒っている時である。椿は、長い髪をたなびかせ、颯爽と由紀子の家を目指していく。

夏樹には、それをただ見届けるしか出来なかった。

由紀子の家まで、およそ三十分程度。その道程を、椿は十五分に短縮させた。端から見るとただ歩いているだけのように見えるが、速さが尋常ではない。彼女の所だけ、早送りでもしているかのようであった。

由紀子の家族とは顔見知りなので、チャイムも鳴らさずに家に上がる。『おじやまします』と、居間でテレビを見ていた由紀子の母親に挨拶してから、二階へ。階段上がってすぐ左の部屋。そこが由紀子の部屋である。

ドアを開けると、ガンと何かにぶつかる。散らかっている本に阻害され、ドアは半分ほどまでしか開かない。その間に体を滑り込ませ、室内へ侵入した。

由紀子は、気持ち良さそうにまだ眠っていた。もう昼も過ぎていくというのに。ここまでくると、椿も流石に呆れていた。起こそうと近づいたとき、机の上にある本が目についた。脳関連の本に、精神疾患の本。あとは、小難しくてよく分からない本が何冊か並んでいた。

「・・・また凄く難しい本を。お医者さんにでもなるつもりなのかしら」

由紀子の知識は偏っている。彼女が医者になろうとするならば、先に勉強しないといけないことは山ほどある。なにせよ、由紀子

を起こさないと話は進まない。椿は、由紀子を揺すり起こした。

「ん・・・あれ・・・？ 椿・・・さん？」

寝とぼけた顔で、目を擦っている。椿は、由紀子がいつも付けている眼鏡を由紀子にかけてあげた。

「おはようございます。随分とゆっくりとしたお目覚めでしたね。殴りますよ」

由紀子の顔は、青ざめていた。現状を理解した様子である。

「・・・ゴメン。殴らないで。すぐに着替えるから」

「まったく、また夜更かしをしていたんでしょう。あんな難しい本を読んで」

「ああ、ちよつとね」

由紀子は答えをはぐらかした。さすがに椿もそれ以上突っ込んで聞くわけにもいかなかったので、由紀子の着替えを手伝う事にした。「だから！　なんで、そんな地味な服を選ぶんですか！　それ、ヨレていますよ！　それも却下です！　由紀子さん、少しは自分が女性であることを自覚してください！！」

結局、椿は自分で選んだ服を由紀子に着せ、髪を整わせてから、引つ張るように待ち合わせ場所へと移動した。由紀子は、大層困り果てた顔をしていた。

待ち合わせ場所へと着くと、見覚えのない少女が一人、夏樹の側に立っていた。少し赤茶けたセミロングの髪に、ダークブルーの瞳。やや痩せすぎているようだ、胸だけが異常に発達していた。まるで、どこぞの令嬢——そんな風に、椿の瞳には映っていた。

「あの方は？」

由紀子に聞く。

「ああ、神華さんだよ。鬼のように可愛いでしょ？」

「そうですね。どこから騙して連れてきたんですか？」

「人をなんだと思っているのよ。クラスメートで、ちよつと色々ときっかけがあったただけだって。夏樹、神華さん、ごめん、待たせて」

由紀子が二人の下へと走り寄っていく。

「なにが、ゴメン、だよ！ 遅い！ 遅すぎる！ ユッキーが言い出したのに、何分待たせるわけ?!」

「面目ない」

そこで由紀子は振り返って、神華に椿を紹介していた。

「神華さん、友達の椿さん」

「はじめまして。橘椿です。どうぞ、良しなに」

丁寧な頭を下げると、神華も同じように会釈していた。

「天野神華です。よろしくお願いいたします」

容姿と同じで、とても品のいい人である。しかし、何かしらの違和感があった。それがなんなのかまでは分からなかったが、確かに何かが変わる。それは確信できたのだが、肝心の何がおかしいのかが分からなかった。

椿は、気にする事でもないと開き直る。人間、一つや二つ秘めているものがあつてあたりまえである。椿自身にも、由紀子や夏樹が知らない思いを抱えている。それが当たり前なのだ。

「じゃ、ボチボチ行こうよ。時間が、誰かさんのせいでこっそりなくなっちゃったしね」

「はいはい、私が悪うござんすよ」

「全員分奢ってもらわないと割に合いませんわね」

「私に死ねと申しますか、椿さん!」

「介錯は、友人代表で私がしてあげますから、どうぞすっぱりと」

「ま、まだ死にたくない! 夏樹、なんとか言つてよ。あの人、素で怖い」

「私に助けを求めないでよ! 大人しく、すっぱりされちゃえ」
「ブルータス、お前もか!」

そんなこんなで一行は、海沿いに五分ほど歩いた所にある、喫茶店『海の家』を目指した。ひねりも何もない名前であるが、見た目は海の家なんて粗暴なものをイメージさせる佇まいではなかった。綺麗なレンガパネルで覆われた、洋風の一軒家。そこだけ、まるで

世界が違つかのような感じを抱かせるその店を見て、神華は『ここだったんですね』と呟いていた。

「あつ、知ってるんだ、この店」

由紀子と夏樹と椿。この三人は、この店によく来ていた。由紀子の問いに、神華はわずかに陰りのある笑みを見せた。

「はい、少しだけ」

セミロングの髪をきゅっと掴む仕草。いつもの明るい感じがすっかりと消えてしまった神華に、椿、夏樹、由紀子は顔を見合わせた。

「シノ、嫌なら場所を変えるよ」

「そうそう、別に他にだってあるわけだし」

「ですね。あえてここにしなくても問題はありませんよ」

三人の意見に、神華はいつものように笑って見せた。

「いえ、平気です。別に、この店が嫌いというわけではありませんから」

神華がそういうのなら、無理に変える必要もない。ということで四人は、店の扉をぎいっと押し、中に踏み込んだ。

「いらっしやい」

という男の声は、カウンターの向こう側にいる、ひげを蓄えた四十代ぐらいの渋いマスターのもの。濃厚なコーヒーの匂いが漂う。マスターは、入ってきた由紀子達を見て。

「よっ、乙女達！ 久しぶりじゃないか」

と、気軽に挨拶してきた。常連というわけでもないが、一番最初に来たときに夏樹とオーナーが妙に意気投合したおかげで、すっかり顔を覚えられてしまっていた。

「ちいゝす、また来てやったよ。相変わらず、儲かってないでしょ？」

夏樹の言葉に、『うるせえ』と答えるオーナー。この店、決して悪くはないのだが、オーナーの性格が災いして客が少ないのだ。

「ところで・・・むっ？」

オーナーは、神華を見て眉根をひそめる。そんなオーナーに、神

華は軽く頭を下げた。

「・・・お久しぶりです」

「えっ？ 神華さん、知り合い？」

驚く由紀子。それよりも驚いていたのは。

「おお~~~~~!!!!!!」

なんと、店中に声をとどろかせたオーナーだった。

「神華ちゃんか！ 久しぶりだな。さっぱり髪を切っちゃって、失恋でもしたのか？」

オーナーにそういわれて、神華は困った顔をする。それでオーナーは、なにやら納得がいったようだった。

「おっと、ごめんよ。今日は、おごりにしてやるからな」

「・・・そんなに気を遣わないでください」

神華とオーナーが紡ぐ、不思議な雰囲気。由紀子達もわけが分からず立ち尽くす羽目に。

すると。

「オーナー、うるせえぞ」

と、言う声。今まで気付かなかったが、カウンターの端の方で一人の男が突っ伏していた。大きな背中に、短髪の髪。椿は、その容姿を見てはつととなった。もしかしたら——彼女の憶測は、夏樹と由紀子の言葉で、確信へと繋がった。

「神山さんだ！ うわあ、こんな所で会うなんて、偶然！」

「あら、夏樹じゃないか。偶然じゃないか。それに、小泉も。お前たち、友達だったんだな」

「ユツキーのことも知っているの？」

「ああ、色々面白い話をな」

照れくさそうに由紀子が頭を下げている。間違いない。彼が、『神山聡』。由紀子のことを、『茜』と呼んだ男。椿は、聡を睨みつけるように見つめていた。

楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまった。由紀子達と別れ、椿は

一人、大木公園の守り木の下へと足を運んだ。あの後すぐに、神山聡は『俺は、邪魔者だな』と言って、店を出て行った。そのとき、すれ違い様に彼に走り書きしたメモをポケットに突っ込んでおいた。それに気付けば、ここに現れるかもしれない。現れなければ、また違う方法を取ればいい。顔は、しっかりと覚えた。いつでも探し出せる自信があつた。

守り木の前に辿り着くと、守り木の下ベンチに聡が座っていた。眠っているようだ。近づくと、聡は示し合わせたかのように目を覚ました。少し寝ぼけた瞳で、彼は椿を見ていた。

「君は確か・・・」

「たちはな橘椿です。あなたのお名前を聞かせていただけませんか？」

並ならぬ気配を感じたのだろう、聡は立ち上がった。

「・・・神山聡だけど。あの手紙、君？」

「ええ、お話がありまして。正直に答えて頂きたい」

「話？」

「どこで、『茜』という名前を知ったのか、教えていただけませんか？」

「なぜ、君がその名前を・・・」

「由紀子さんから聞きました。教えなさい。どこでその名前を知ったのか」

口調は穏やかであるが、椿の言葉は非常にきつかった。

「そんなに重要な名前なのか？ 悪いが、俺は知らない。あの件は、人違いとしてもう片付いたことなんだ。今更、ほじくり返すのは止めてくれないか？」

椿は、聡の胸倉を掴みあげた。

「とっても重要な名前よ。一般人が知っていていい名前じゃないわ。あなたは何者？ なぜ、由紀子さんを『茜』と呼んだのか。知らないで済ませないわよ」

「よく分からないが、そんなに大切な事なのか。手を離してくれないか？ このままじゃ、話にくい」

椿は仕方がないと手を離した。聡は、服を調える。

「小泉にも言ったが、俺は記憶喪失なんだ。今年の四月三日以前の記憶が俺にはない。だから、『茜』というのが誰なのか、分からない。小泉に似ていたのかもしれない。俺が言えるのは、それぐらいのことしかない」

「記憶を喪失している・・・」

そこで椿は、由紀子の机の上に積んであった小難しい本の事を思い出す。あれは、彼の記憶喪失について調べていたものだったのだろう。

「『茜』というのは、君の知り合いなのか？ もし知り合いだったら、会わせて欲しいんだが。記憶を取り戻したいんだ。会えば、戻るかもしれない」

にわかに信じがたい。記憶喪失なんて、嘘の常套手段である。だが、彼が嘘を言っているように見えないのも、確かだった。

「・・・茜さんは、ずっと昔に亡くなっています。由紀子さんと縁ゆかりのある方なんです。この話は、内密にお願いいたします。由紀子さんを、困らせたくないでしょ？」

「そっか。分かった。もう聞かない。忘れるよ。そういうことなら聡は、あっさりと椿の言葉を信じてくれた。根はとっても素直な人であるようだ。そんな彼を、疑うのはお門違いのように感じた。

「ごめんなさい。急に意味不明な話をして、胸倉まで掴んで」

「気にしてないよ。小泉のこと、大切なんだろっ？」

「ええ、とつてもとつても大切な人です」

「なら、それでいい」

聡は、優しく微笑み、ベンチに置いていた小さな箱を手を取った。「じゃ、俺は帰るわ。君も気をつけて帰るんだぞ」

何事もなかったように聡は帰って行った。椿は、その背中をどこか複雑な表情で見送っていた。

「記憶を喪失。過去に何かしらの接点があったのなら、由紀子さんと接触させるのは危険なのかもしれませんわね。でも、そんな曖昧

な事では動けない。内偵を進めてもらって、確たる材料を揃えて、それから判断すべきですね」

心がざわついていた。なにか、良くないことが起こるような気がしてならなかった。

第四話 青き瞳の少女

2005年 5月

初夏の爽やかな風が、山の頂上から吹き降ろしてくる。

「ああ、涼しい。結構、登ってきたね」

由紀子は、後ろを振り返り、少し遅れて付いてきている神華に声をかけた。神華は、日差しをガードするためか、白いつば広の帽子をかぶっていた。

「はい、結構・・・登りましたあゝ」

由紀子も体力があるほうではないが、神華の体力のなさ加減は、尋常ではないようだ。もう、いますぐにでも座りこんでしまいそうである。

「休憩する？」

「いえ、もう少し、頑張ります」

ここは、若草山。二人は、この山の中腹よりも若干上にある公園を目指して歩いていた。折角のゴールデンウィークである。公園では、そろそろツツジが咲いているのでなかうか、とのことで二人は山を登っていた。夏樹や椿の姿が見えないのは、それぞれ用事があつて来られなかったのである。

「後、半分ぐらいあるよ。そろそろ、休憩しよう」

頑張るという神華であるが、目に見えて速度が落ちていた。一休みさせた方が、無難であると由紀子は判断したのだ。

どこか、休むのに丁度いい場所はないものか。周りを見渡そうとしながら歩いていた由紀子は、突然民家から飛び出してきた少女に気付けなかった。

衝突する二人。

「うわっ！」

「きゃあ！」

二人の悲鳴が、響き渡る。由紀子は、軽くよろけたぐらいだった

が、少女の方は進路を無理やり変えようとして失敗したらしく、派手に転がっていた。とても痛そうである。

「だ、大丈夫?! ごめん、全然前見てなかった。怪我してない?」

「由紀子さん、大丈夫ですか?」

神華も追いついてくる。

「わ、私のほうこそ、ごめんなさい! あの、その・・・」

少女は、座ったまま慌てふためいている。由紀子は、彼女の側で屈み、視線を合わせてあげた。

「私は、大丈夫。あなたの方こそ、派手にこけていたけど、怪我、してない?」

もう一度、ゆっくりと語りかける。その時、少女と目が合い、驚いた。少女の瞳の色が、青色だったのだ。神華も少し青色が混ざっているが、少女のはなんの混ざり気もない、青一点のみ。清々しくも美しい、空の色だった。

「わ、私は大丈夫です。ごめんなさい、本当にごめんなさい」

少女は、視線を逸らすと、何度も謝りつつ民家の方へと帰っていく。その後姿がなんとも寂しげで――。

「待つて」

気付いたら、由紀子は少女を呼び止めていた。少女は、足を止めたが振り向かなかった。瞳の色を、気にしているのだろう。

「あ、えと・・・休憩場所を探しているんだけど、近くにいいところないかなとか・・・」

「休憩場所・・・」

少女は、真剣に考えてくれているようだ。

「あの・・・ウチの玄関でいいなら」

「いいの?」

「お婆ちゃんがないから、家には上げられないけど、玄関なら大丈夫だと思う」

由紀子は、彼女の言葉に甘える事にした。

立派な家である。玄関も広くて、神華と二人、座っていてもかなり余裕があった。少女が出してくれた麦茶を口に含む。

「えと、名前、聞いていい？ 私は、小泉由紀子」

「天野神華です」

「氷女^{こおりめ}・・・沙夜です」

不思議な苗字に、由紀子は驚いていた。

「コオリメ・・・どう書くの？」

「氷の女と書いて、『こおりめ』です」

「へえ、変わっているね。初めて聞いた」

温度が、外とだいぶ違う。肌寒さを感じるほどに、ほどよく冷えていた。麦茶をまた飲む。会話が途切れてしまった。どうしたものかと考え込む。考えているうちに、麦茶は空になってしまった。空になったらならば、ここを後にしなければならぬ。それでいいのか？ 由紀子は自問自答した。答えは出ていた。後は、勇気が必要だった。

「由紀子さん？」

考え込んでいる由紀子を、心配している神華。

由紀子は、決心した。

「あの・・・氷女さん。私たちと、一緒に来ない？」

「えっ？」

さすがに沙夜も戸惑っていた。

「あ、忙しかつたら無理に、とは言わないけど」

「・・・どうして？」

沙夜の疑問は、当然であった。突然、一緒に来いと言われても、誰でも困る。

「・・・なんとなく、寂しそう・・・だったから」

「氷女さん、一緒に行きませんか？ 外はとても穏やかな天気です。こうやって巡りあえたのも、きっと何かのご縁です。青い瞳の事、気にしていらっしゃるようですが、私も少し、目は青いです」

神華は、自分の瞳を指差して見せた。

「そんな私とでも、由紀子さんは分け隔てなく付き合ってくれます。だから、何も心配する事はありませんよ」

「神華さん・・・」

神華のフォローはありがたかった。由紀子では、彼女ほど上手に事を運ぶ事ができない。

「私が・・・付いていても・・・いいんですか？ 迷惑・・・に・・・なりませんか？」

「私なんか、さっきから迷惑のかけっぱなしです。山登り、苦手なんです」

「ツツジを見に行くつもりなんだ。上の公園に」

「・・・行きます」

沙夜は、本当に嬉しそうに微笑み、由紀子を心の底から安心させた。

「氷女さんは、この町の出身？」

沙夜は山を登るために、スカートからジーパンに履き替えていた。「いいえ、最近この町に。その前は、天妙に」

「天妙ですか。都会ですね」

神華が言つとおり、天妙はこの辺りでは一番栄えた町である。ちなみに櫻町は、この辺りでは一番冴えない田舎町である。

「いいなあ。私も都会に住んでみたいよ。ネッカフェとかこの町ないしね。もう最悪」

「ネッカフェ？ コーヒーの新種？」

沙夜のお惚け発言に由紀子が吹いた。

「コーヒーの新種って・・・」

「由紀子さんが変な縮め方をするからですよ。インターネットカフェ、ご存知ありませんか？」

「あ・・・パソコンが出来る所？」

「それです。でも私も、いまいちパソコンとかインターネットとか、分かりませんけど。電子機械扱うとよく壊しちゃうので、触らせて

くれないんですよ」

「なにそれ、ナチュラル家電クラッシャー？ 現代の敵じゃない」

「邪神崇めている人に言われたくないです。えい、退け悪魔」

「ちよつと、ロザリオとか近づけないでよ！ 溶ける！」

慌てて神華から逃げる由紀子。そんな様子がおかしくて、沙夜はくすくすと笑っていた。

由紀子達は、舗装された道を歩いている。公園まで、分かれ道はない。まっすぐ道沿いに歩いていけば、その内着くような場所である。

「この町の出身じゃないなら、櫻の姫様の伝説とか知らないよね？」
のんびり歩きながら、由紀子は話を進めた。

「櫻の姫様？」

「昔ね、この辺りには宇野国という国があつてね。この山の頂上には、宇野国の城跡があるのよ。ちなみにこの町の名前は、その宇野国の最後の領主、すなわち櫻姫からつけられたもののなのよ」

由紀子が、青々とした山を見据える。

「最後つて事は・・・滅びてしまったんですか？」

「うん、安土桃山時代のお話よ。豊臣秀吉を倒すために、鹿児島のとある大名が動いたの。兵力は、およそ三十万。運が悪い事に、宇野国はその進路上にあつたわけよ。鹿児島の大名は、こう言つたわ。兵力と食料を補充させろつて。しかしね、櫻姫はその話を蹴つて、千にも満たない兵力で戦いを挑んだのよ。まあ、結果は見えていたわね。城に閉じ込められた彼らは、全員その場で自害したと伝えられているわ」

言葉を失っている沙夜。構わず、由紀子は話を続けた。

「何故彼女が鹿児島の大名の話を受け入れなかったのかは、大きな謎となっているの。それに、兵は自害となっているんだけどね、櫻姫の記述はないのよ。死んでいたのか、生き延びていたのか。資料が全然ないから、分かんないんだけどね。敢えて、こんな地方の伝承を調べている人もいないし」

「この町に『櫻』とつけたり、御櫻神社みさくらというのがあったりするくらいですから、少なくとも彼女の思いは、後世の人に受け継がれていったと、私は思っています」

神華も話を知っていたようで、そう由紀子の説明に補足を付け加えた。山を見上げ、森を見渡す沙夜。五月の爽やかな風を受けて、揺れる木々。それを見て、沙夜は何かに気付いた様子。

「待つて・・・！」

「どうしたの？」

不思議そうに足を止める由紀子。神華も足を止めた。沙夜は、彼女らに説明することなく、周りを見渡していた。一体何を見ているのだろうか。由紀子も沙夜の視線を追いかけたが、いまいちよく分からない。沙夜は、かなり切迫した表情をしている。一体、何がそうさせているのか――。

突然、周りの風景が一変した。

「へっ？」

由紀子の間抜けな声が、静かな森の中に響き渡った。さきほどまで三人は、間違いなく舗装された山道を歩いていた。しかし、沙夜の切羽詰った声から数秒もしないうちに、周りはうつそうとした森の中に变化していたのだ。

「どういうこと、これ？ 私たちはさっきまで確かに・・・そうだよね、神華さん」

「そのはずです。氷水さん、説明を求めてもよろしいですか？」

「あ、さっき『待つて』とか・・・どういう意味？」

沙夜は少し、考え込んでいた。我慢強く、由紀子も神華も彼女が話し出すのを待った。

「・・・私、不思議な力があるんです」

沙夜は、そう切り出した。

「霊媒。不思議な事、『見える』んです」

「霊媒！ 氷水さんは、霊能者なの？！」

驚く由紀子に、沙夜は寂しげに首を横に振る。それが何を意味し

ているのか、由紀子は咄嗟に理解した。

「・・・ゴメン。でも、安心して。誰にも言わないし、その事で氷女さんの事、突き放したりはしないから。ね、神華さん」

「はい、当然です」

二人にそう言われ、沙夜は戸惑いつつもその優しさを受け入れた様子。泣きそうになりながらも、微笑んでいた。

「ありがとうございます・・・」

「それで、氷女さん的には、どうなの？」

「さつき、切り替わる瞬間に、声がしました」

「声？ 由紀子さん、聞こえましたか？」

由紀子は頭を横に振る。

「全然。何も聞こえなかった」

「とつても、無機質で冷たい声でした。『良い目をしている』、そう聞こえました。きつと、私の能力のことを言っているんだと思います。ごめんなさい。もしかしたら、私が・・・巻き込んでしまったかもしれません・・・」

「分からない事は考えても仕方ないよ。そんなに自分を責めないでいいから」

改めて、周りを見渡す由紀子。獣道も何もない、うつそうとした森の中である。場所を把握できるものは、何もなかった。

「・・・歩いてここまで来たことは間違いないと思うので、若草山だと思います」

沙夜が、すかさずフォローしてくれる。

「ねえ、この先、どうやらひらけているみたいよ」

由紀子は、登り方面を指差した。山を降りるのであれば、降るのくだが基本である。しかし――。

「行ってみない？ わざわざここまで連れてこられたという事は、きつと意味がある。その意味を知らない限り、こういう場合、山から降りられないんだと思うんだけど、どう？」

「私は由紀子さんに賛成いたします。氷女さんは、どう思いますか

？」

沙夜は、難しい顔をしていた。

「・・・その通りかもしれません。でも、気をつけてください。この先、とても嫌な感じがします。暗くて、冷たくて、悲しい・・・そんな思いが、一杯広がっています」

「・・・行こう」

由紀子が、神華と沙夜にそれぞれ手を差し伸べた。三人は手を繋いで、山を登り始めた。そこに何かがあるのか——確かめるために。

森の中にぽつかりと空いたその場所は、見渡せる限りで運動場の半分程度といったところか。前方には、左半分しか残っていない2メートルほどの鉄棒の門と、それに連なる風化した塀。ところどころ穴が開いたり、上部の方から壊れていたり、散々な姿である。

「寂しい所ですね」

神華の声が、静かに響く。門の向こう側は、建物があったような形跡は全くなく、ただただ好き放題に雑草が生えている。もし、この中に建物があったとしたら、それは家とかそういうレベルではない。屋敷と呼べるものが、どつかりと腰を落ち着けていたのかもしれない。どこかの金持ちの別荘か、はたまた本家か。表札らしきものもないので、ここに何があったのかは空想することしか出来ない。

「由紀子さん、あれ」

神華が指差していたものは、塀の手前ある石碑だった。石でくみ上げられた台に、人の身長と同じぐらいの岩が立てられており、平らに削った場所に『空音・音子、安らかに眠れ』と彫られ、金箔が塗り込められていた。

「なんて読むのでしょうか。分かりますか？」

由紀子は、魂が抜けたような表情で、石碑を見上げていた。その黒い瞳の色が、急に赤い色へと変貌した。それと同時に、ほほを滑る一滴の涙。

「お母様、姉様・・・こんな所にいらっしやっただけですね。やっと

会えた・・・」

「由紀子さん・・・？」

神華と沙夜の手から離れ、石碑に歩み寄り愛おしそうに触れる由紀子。その瞬間、弾けるように由紀子は我に返った。瞳の色も、幻だったかのように黒い色に戻っていた。

「あれ・・・？ 私・・・なんで・・・泣いているの？」

頬を伝わっていた涙を拭い、呟く。石碑を見た瞬間、悲しさが湧き上がってきた。だが、その理由が分からない。由紀子は、石碑に書かれている人たちを知らない。知らないのだ。知らないはずなのだ。

どこことなく由紀子の表情が強張り始めている事に、神華は気付いていた。だから、咄嗟に彼女は由紀子の手を引いていた。

「戻りましょう。ここには、なにもありません」

「そ、そうだね・・・戻ろう」

由紀子も深くは考えなくなかったため、神華の言葉に従った。共に山を降りようとした振り返ったとき、沙夜が頭を抱えて座り込んでいるのに気が付いた。

「氷女さん？！ どうしたの？ 頭、痛いのか？」

由紀子の言葉に、沙夜は首を横に振った。

「・・・『声』が」

沙夜は脂汗をかいていた。尋常ではない様子である。

「声？ 声って・・・声？」

周りを見渡しても、耳を済ませても沙夜がいう『声』は聞こえてこない。またしても、彼女だけに聞こえる声なのか。

「私の中に・・・入ってくる・・・！」

そこで由紀子は、あることに気付いた。沙夜は、言っていた、自分の能力は、霊媒である——と。

「もしかして・・・！ とりあえず山を降りよう。ここは、沙夜ちゃんにとってよくない場所みたい」

「でもどこから？」

「とりあえず下に降りればいいのよ」

沙夜を支え、来た道を戻ろうとしたその時、彼女たちの前に一匹のオレンジ色の猫が現れた。

「あら可愛い」

「この猫・・・」

由紀子には、見覚えがあった。

「知っているんですか？」

「うん、時折見かけるのよ。首輪もしてないから、ノラだとは思うけど」

そんな風に話をしていると、猫はきびすを返して山を降り始めた。由紀子と神華は、顔を見合わせた。

「もしかなくても、案内する気なのかな」

「猫は、使い魔にもなるぐらい賢い生き物ですから、あの猫もまた何かに使役されていたり・・・これでは由紀子さんと同じですね」

「その説、面白いわ。案外、ウチの母親だったりしてね」

「猫を使役されているんですか？」

「そういうわけじゃないけど、不思議な人なのよ。猫の一匹や二匹、使役していそうなぐらいにね」

母親のことを思い出して、由紀子は苦笑を浮かべていた。

由紀子たちは、オレンジ色の猫の案内により、無事山を降りることが出来た。近くに最初目指していた所とは違う、小さな公園があったため、その東屋あずまやへと、とりあえず避難した。

「氷女さん、お茶」

少し落ち着きを取り戻した沙夜は、由紀子が差し出したお茶を一気に飲み干し、重いため息を吐いた。心底疲れた顔をしている。

「大丈夫？」

「はい・・・もう大丈夫です」

「はあ、良かった。何事もなく」

「本当に心配しました」

安堵する由紀子と神華であるが、沙夜の表情は暗い。

「私のせいで・・・ごめんなさい・・・」

由紀子は苦笑し、沙夜の頭を軽く拳で叩いた。びっくりして頭をさする沙夜に、由紀子は言った。

「氷女さんのせいじゃない。誰もそう思ってない」

由紀子の言葉は、確かに沙夜に届いたのだろう。彼女はまた泣きそうな顔で笑顔を作り――。

「はい」

と小さく返事をしていた。

「あ、由紀子さん。あそこ、少しですがツツジが咲いていますよ」
山の土手に少しばかりツツジが咲いていたが、圧倒的に数が少ない。

「あちゃ、あんまり咲いてないね。少し、早すぎたね」

「でも、綺麗です。あ、弁当、食べません？ 少し遅くなっちゃいました、私、お腹ペコペコです」

「ああ、私も。沙夜ちゃん、一緒に食べよう。母さんに言って、少し多めに作ってあるからさ」

「私も、恵美子さんに頼んで、多めに作ってもらいました。一緒に食べましょう」

沙夜は、堪えられなくなって涙を流した。嬉しかったのだろう。彼女が、どういう経緯でこんな田舎町に来たのかは分からない。でも、『青い瞳』と『霊媒』、その二つが彼女を苦しめてきたのは間違いない。寂しげな後姿は、そのためだったのだろう。

「いただきます。一緒に・・・いさせてください・・・」

泣きながら、沙夜は言った。由紀子も神華も、そんな彼女を笑顔で受け入れた。

第五話 沙夜の能力を封印しましょう 前編（前書き）

異質な能力に悩む沙夜。

彼女は、同じ力を有していたサトリに能力を制御する術を教えた『水及』に会いに行く。

第五話 沙夜の能力を封印しよう 前編

鳥のさえずりが聞こえて、我に返る。なんととはなしに、襖を開けなければならぬと思ひ、襖を開けるとそこに一人の少女がいた。少女は、言葉を連ねている。しかし、聞こえてこない。何も、何も――。

「姉様……？」

その言葉に反応して、ぼやけていた少女の顔が僅かに見えた。気の強い瞳を有す、綺麗な子である。少女は、優しく微笑んだ。

「私が守るから。絶対、いつか、普通に暮らせるようにするから！だから、もう少し待っていて。私が守る。父の好きなようには絶対させない……！」

カーテンから漏れる光で、由紀子は目を覚ました。頬を伝っていた涙を拭い、彼女らしくない真剣な表情を浮かべる。

「夢……また泣いてた、私。姉さんなんていないんだけどね。はあ……また私自身が薄れていく」

夢を見るたびに感じる、食い違い。自分が小泉由紀子ゆきこであるということが確信を持てなくなる、揺らぎ。そして今日、もう一つ感じたことがあった。

「忘れてはいけない約束を……忘れちゃった気がする」

何か大切なものを失ってしまったという、喪失感。あの場所を訪れてからずっと、由紀子は今までに感じたこともない不安感を覚えていた。

気を取り直して、由紀子は居間へと降りた。母親がワイドショーを真剣な面持ちで見ている。

「おはよう、母さん」

「……おはよう。ねえねえ、由紀子。結婚するんだって、この人。わあ、ありえないー」

「ああ、そう」

由紀子にとって、芸能ニュースなどどうでもいいことこの上なかった。

インスタントコーヒーを淹れ、テーブルの上に転がっている菓子パンを選ぶ。カレーパンか、チョココロネか。

「コロネよね、やっぱ」

コロネの包装を破り、食べようとしたその時――。

「由紀子」

母親が声をかけてきた。わざわざ、彼女の前に座ってくる。

「なに？」

「あのね、由紀子、最近私に隠している事ない？」

「どうして？」

母親が何を言いたいのか、いまいち理解できない。

疑問を疑問で返してやると、母親はなにやら悩みだした。とても言いづらそうである。一体、何をそんなに困っているのだろうか。

「あのね、章吾がね・・・由紀子が、年上の男の人と付き合っているとか言うだもん！」

咀嚼していたコロネが、勢い良くノドにダイブし、むせる由紀子。

「どうなの？！ 由紀子！」

「んなことあるわけがないじゃない！ 朝から変なことを言わないでよね！」

「でもね、章吾がね」

「ない。幻覚でも見たのよ。兄さん、病氣してそうな顔をしているし」

「・・・それはどうかな」

母親が鬱陶しいので、食べかけのコロネとコーヒーを持って由紀子は二階へと非難した。内心は、冷や冷やしていた。

「兄さんに見られていたなんて、不覚だった・・・今度から気をつけよう」

聡が恋人。それはそれで――慌てて頭を振って、変な考えを振り

下ろす。机に向かつて、町の図書館から借りてきた記憶についての本を開いた。

「ない。ないない。私は、単に話し相手をしているだけなんだし。ない、ないない。ないない」

再びコロナを口に含んだ時、どこからともなく軽快なメロディーが流れてきた。その音にびっくりして、再び咽る。涙目になりながら、由紀子は携帯電話を探し始めた。

「もう、誰よ。誤嚥で殺す気？」

音源を頼りに本をどけて、埋もれていた鞆を回収、その中から携帯を取り出した。

電話は、番号から察するに一般家庭の電話機からかけられているようだ。しかし、見たこともない電話番号である。少し迷った挙句、興味があつたので出てみることにした。

「はい」

警戒して、返事はそれだけ。すると、思わぬ返事が。

『あの・・・氷女ですが・・・』

「へ？ あ、沙夜ちゃん？！」

思わず姿勢を正してしまう由紀子。携帯の番号を教えていたことを、今更ながらに思い出した。

「はいはい、由紀子です。どうしたの？」

『あの、今日良かったら、歌宝山に用事が出来たので・・・』

「歌宝山に？ それはまた辺鄙へんぴな所に用事だね」

歌宝山といえば、櫻町の北にそびえる高さ七百メートルちよつとの山である。こちらの山は、前回登った若草山と違って、登山者などまじらない。そもそも町の人は近づくことさえない、そんな山であつた。

『あの、私の能力のことで・・・』みな『水及』、ていう人を探しに』

「水及？」

その名前を聞いたとき、少し胸が痛んだ。名前は全く知らない。それなのに、この痛み。やはり自分が知らない何かがあるのではな

いか——そんな思いに駆られてしまう。

『はい、山神に仕える巫女……だそうです』

「ああ、伝承で聞いたことがあるわ。大木公園の中央にでつかい桜の木を植えた人ね。でも……生きていたら千歳以上よ。八百比丘尼もびつくりよ」

櫻町の古い伝承。

人の愚かな争いに呆れて、神様が眠りについてしまった。神様を失った町には、魑魅魍魎が跋扈し、人を喰らい、田畑を荒らした。そんな時、一人の乙女が現れた。川を流れる美しい水さえ霞んで見えてしまうほどの、青い髪と瞳を有したその乙女は、美しい歌声で魑魅魍魎を鎮めた。そして、一本の木をこの町に残していった。それが、大木公園の守り木だと言われている。その伝承が一体いつの時代のものかはよく分かっていないらしいが、少なくとも千年以上は前の話ではないのか、そう言われている。常識的に考えて、生きているはずがない。

『後継者の方でもいいんです。会って、私の能力を制御する方法を教えてください』

「分かった。根拠がないわけでもないんでしょう？　なら、付き合おうわ。どうせ暇だしね。ついでに神華さんも呼んで、三人で行こう」
『ありがとうございます！』

電話の向こう側で、沙夜がとても喜んでいる事が分かった。それが、由紀子に笑みを点らせた。

ということ、沙夜、由紀子、神華の三名は、大木公園で合流後、一路北を目指していた。

「結局、沙夜さんの能力、霊媒？　ですか。それは一体どういうものなんですか？」

「神華さんも聞いたことがない？　恐山の『イタコ』の話。彼女らこそ、『霊媒』の見本みたいなのかな。『口寄せ』とも言っみたいだけど」

「ようするに、死者の言葉を己の口を通じて形にする・・・そういう解釈でよろしいのですか？」

「だと、私は思っているけど、沙夜ちゃん的には、あたり？」

沙夜は、少し困った顔で『はい』と答えた。

「どうしたの？ 元気ないみたいだけど」

「地顔なんです。気にしないで下さい」

「なにそれ」

由紀子は笑っていたが、沙夜が何か嘘を付いている事に薄々気付いていた。彼女の能力は、霊媒だけではないかもしれない。なににせよ、彼女が隠している事をわざわざ聞く必要もないので、由紀子は何も聞かなかった。

「ところで沙夜ちゃん。その『水及』とかいう人の話は、誰から聞いた話なの？」

「おばあちゃんからです。おばあちゃんは、氷女家に伝わる伝承を知る最後の人。私みたいな青い瞳の人は、氷女家では二人目なんです」

「そうなんだ」

「はい。サトリという人で、同じ能力を持っていたそうです。そのサトリという人に、能力を制御する方法を教えたのが、『水及』という人らしいです」

「へえー、でも、電話でも言った通り、生きていたら千歳近いはずよ」

「おばあちゃんみたいに、知識を受け継いでいる人がいれば・・・そう思っ」

「『水及』の知識を受け継いでいる人・・・」

椿の横顔が、脳裏を過ぎった。彼女が裏でやっている家業を、由紀子は知っていた。彼女なら、何か知っているかもしれない。

「とりあえず行ってみよう」

知っているかもしれないが、教えてくれるとも限らない。現場に行っ、手がなくなっった時点で頼る方向にした。

大木公園から、およそ三十分弱程度。『魔の巣窟』とも言われる櫻町ナンバー一の吹き溜まりである飛山団地の裏側に、由紀子たちはたどり着いた。飛山団地の裏は、まばらな住宅街と畑で構成されており、その先に歌宝山が鎮座していた。

「こりゃ・・・まるで難攻不落の居城ね」

あぜみち

畦道から歌宝山を見上げ、由紀子はぼそりと言った。ないのだ。

道とか道とか道とかが。畑を過ぎると、ダイレクトに草むらに突入その先は、もううつそうとした森の中だ。踏み込みようがなかった。

「一つ、案件があります？」

神華がすつと手を上げた。

「案件？」

「はい。この畦道を東に、病院の方へと向かうと、途中に『沢村探偵事務所』という看板があるんです。なにか、ご存知かもしれませんよ」

「へえー、そんなのがあったんだ。あんまりこっちの方には来ないから、知らなかったよ。でも、それ悪くないかも？」

由紀子が、沙夜に話を降る。しかし、沙夜は話を聞いておらずじつと歌宝山を見つめていた。彼女が何かをじつと見ているその様は、若草山を登っていた時の事が、由紀子に連想させた。

「・・・沙夜ちゃん？ またなにか見えているの？！」

また景色が入れ替わるのではなかるうかと、周りをきよろきよろと見渡してみたが、今度は何も起こらなかった。

「あ、大丈夫です」

我に返った沙夜は、苦笑を浮かべる。

「この山、結界が張ってあるなあ・・・て思っていただけです」
「結界？ 本当に？」

由紀子は改めて歌宝山を見上げてみるが、やっぱり彼女の目には他の山に比べて緑濃い森にしか見えなかった。

「誰かがこの山を管理しているのは間違いないと・・・思います。管理している人に出会えれば・・・」

沙夜は言いよんでいる。さすがにそれ以上のことは、彼女も分らないのだろう。一旦、こちら辺で椿に電話をすべきか、そんな事を思っていると、沙夜が『あっ』と呟いた。

「どうしたの？」

沙夜は、また一点を見つめていた。その視線の先にいたのは、黒い髪を首筋で結った黒い切れ長の瞳の、黒い背広を着た男。じつと、沙夜の事を見つめていた。

「誰？ 知り合い？」

沙夜は顔を横に振る。

「あの人・・・人じゃないです」

「えっ？」

どう見ても人に見えるが、沙夜の瞳にはまた違う姿が映っているのだろう。この山の管理者なのかもしれない。由紀子は、乾いた畑に降り、男に話しかけた。

「あの、すみません・・・」

男の冷たい瞳が、動く。だが、何も語ろうとはしない。

「『水及』という人を探しているんですが・・・」

「様を付ける。お前たち如きが、呼び捨てにしているいいお方ではないいきなりそんなことを言われても、対応に困る。由紀子もどうしたものかと、目をぱくりさせていた。

男は、再び沙夜を見る。どこか懐かしいものを見るような――由

紀子には、そう見えた。

「主がお待ちしております。私に付いてきてください」

男は、歌宝山へと歩いていく。

「どうする？」

由紀子は正直、考えあぐねていた。彼を信用する要素は、何一つとしてない。大人しく付いていくべきなのか。

「私、あの人のこと、知っているような・・・気がします。由紀子さん、ありがとうございます。ここからは、私一人で行きます」

乾いた畑に、沙夜も降りた。

「ここまで来たら、一蓮托生よ。ね、神華さん？」

「はいはい。どこまでもお供いたしますよ」

「あの・・・」

「いいからいいから」

沙夜の手を取り、由紀子は男を追いかけた。神華もその後を付いてくる。沙夜は、また困ったような笑みを浮かべていた。

男は、持っていた鐘を一定のリズムで鳴らす。静かで定期的なその鐘の音は、心の底の何かを呼び覚ますかのような、冷たい音色だった。すると、三人の目の前で、深い森に切れ目が走り、左右に別れた。切れ目には石段が配置しており、曲がりくねって山の中に消えていた。

「凄い・・・」

由紀子は、素直に感嘆していた。

「まるでモーゼのようですわね」

と、神華も驚いている。

物珍しそうに、周りをきょろきょろと見ながら、由紀子達は男に付いていく。

「あの・・・この先に、えと、水及様？ はいるの？」

由紀子の言葉に、男は答えなかった。黙々と登っている。

「気難しい人みたいね」

溜息を一つ。沙夜が、隣で苦笑していた。

「不器用な人みたい。大丈夫です。この先、いると思います。とても、不思議な力を感じます」

沙夜は、森を見つめていた。彼女の瞳には、由紀子や神華には見えないものが、見えているのかもしれない。

石段は、それほどまで長くはなかった。登りきると今にも崩れ落ちそうな廃屋が鎮座した、少し開けた場所に出る。廃屋の大きさは、視界で補えないほど広い。かなりの年代物なのだろう。大部分が、木や蔦などに侵食されていた。由紀子達は、言葉もなくそんな廃屋

を見つめていた。

男は左折した。廃屋を迂回するようである。迂回した先は、人の手が加わっており、整然と木々や草花が並んでいた。迂回を始めて二分も経たないうちに、大きな木が見えてきた。幹の太さは、大木公園にどつかりと座り込んでいる『守り木』に匹敵するものである。その大木の前では、太陽の光さえまだらにしか届いてこない。木漏れ日が、大地で泳ぐ。

「水及様、お連れいたしました」

大木の傘が届かぬ場所、太陽の光が何にも邪魔されず差し込まれている縁側に、彼女はいた。青い髪は腰までまっすぐに伸びており、まるで癖がない。一本一本が、美しい繊維のようである。瞳の色も、湖の青さを思い起こさせるような澄んだ青色で、見ているだけで心が穏やかになる。ゆったりとした薄い青色の衣を身にまとった彼女は、年の頃はぱと見、沙夜と同じぐらいにしか見えない。それぐらいの童顔であったが、普通の人とはどこことなく違う雰囲気があることに、由紀子もさすがに気付いていた。

「お待ちしておりました。どうぞ、中へ。狼命^{ろうめい}、もてなしの準備を」
とりあえず、彼女の言葉に甘える事にした。

縁側からお邪魔して、中に入るとそこは十二畳程度の畳の部屋となっていた。物といえば、小さな高さ五十センチ程度の机が置いてあるぐらいで、とても広々とした印象を与える。イグサの匂いが強く、由紀子は畳を踏みしめながら『うわ、本物だよ、これ』と呟いていた。

狼命と呼ばれた案内してくれた男が、茶菓子や茶を用意してくれる。意外にも、普通に御櫻神社の櫻饅頭が出てきた。現代社会から切り離された、別世界のようであったが、その瞬間、ここは現代なのだと再確認できた。

「どうぞ、大したものではございませんが」

狼命が部屋を出て行く。由紀子は、『いただきます』と言って、とりあず茶を一口啜った。

「遠路はるばる、よくお出でになりました。私の名は水及と申します」

「小泉由紀子です」

続いて、神華と沙夜も名前を名乗った。水及の瞳は、穏やかであるが、どこことなく冷たさを感じる。彼女の瞳を見れば見るほど、由紀子は不安を感じていた。

「あの・・・失礼な事を聞きますが、水及様は、本当にあの伝承の巫女なのでしょうか？」

「巫女は廃業いたしております。仕えるべき神がいないのに、巫女がいるのも変な話でしょ？ どの伝承の事かは分かりませんが、この町の伝承なら十中八九、私のことだと思います」

涼しい顔で、水及は千年以上生きている事を肯定していた。本人にそう言われたところで、眉唾な話であることには変わりはない。由紀子が、信じられない——そう思っていると、突然、くすつと水及が笑った。

「なんて、冗談です。私は、水及の知識を受け継ぎ、それを守り、伝えていくもの。名前も、ただ世襲しているだけで、本名は別にあります。この目もアイコンタクトで、髪は染めているの。水及は、千三百年も前の人です。さすがにそんなに長くは、人は生きられませんがね」

ただ、からかわれていただけのようである。由紀子も表情を崩した。

「そ、そうですね。さすがに、千三百年はないですね」

しかし、隣に座っている沙夜は、由紀子と違って表情を崩していなかった。

「・・・あの水及様、私の能力を封印していただけませんか？」

急に沙夜が話を切り出した。

「初代のサトリさんも、水及様に能力を制御する方法を学んだと、伝承であります。私、この能力に・・・もう振り回されたく、ないんです」

「異なる力は、異なるモノを呼ぶ。異なる力を有するものは、力を有さない者達にとって害そのものである。苦しんできたのですね。少しお手を」

水及が、沙夜の右手を両手で優しく持ち上げる。沙夜は少しビツクリしていたが、手を引つ込めることはしなかった。

「変ですね」

水及が戸惑いを示す。

「変・・・？」

「あなたには、『堰^{せき}』がない」

「セキ？」

「流れを堰^{せき}き止めるもの、ようするに制御する部分が見つからないんです。これは困りましたね」

「同じ能力、というならサトリにも『堰』はなかったんじゃ・・・？」

由紀子の疑問に水及はかぶり振る。

「いえ、彼女にはありました。だから、『変』なんです。サトリと同じ能力、同じ目の色、同じ顔をしているのに、『堰』だけが存在しない。どうして・・・理解できません」

沙夜の手を離し、水及は考え込む。今は、彼女が素晴らしい案を出してくれることを祈るしかない。

「仕方ありません。封印をいたしましょう」

「封印できるんですか？」

「それが出来るなら、手っ取り早いわね」

気楽に言う由紀子と違って、水及の表情は優れない。

「しかし、氷女さんの場合はとても難しい工程になります。本来封印とは、その人の中にある『堰』を外から力を加えて開かないようにすること。もしくは、開き方を忘れさせることになります。でも、沙夜さんには『堰』がありません。すなわち、彼女の意思とは関係なく、能力は発動してしまう。これを発動させないようにするには、能力があることを忘れさせるしかありません。精神に直接手

を加え改ざんするのは、人格が壊れるリスクを伴ってしまいます。
大変危険です」

「そんな・・・」

落胆する由紀子。しかし、沙夜は少し違っていた。人格が壊れるかもしれないリスク。それでもこの能力が発動しなくなるのなら――そう考えていたとき、水及が『あつ』と呟いた。

「私としたことが失念しておりました。一つだけ、安全で確実な方法があります。少し、待ってもらえるかしら？」

水及は、三人の返事を待つことなく立ち上がり、廊下へ。

「狼命、狼命」

と呼びながら、彼女はどこへともなく歩いていつてしまった。水及がいなくなると、部屋の空気は一気に軟化した。

「はぁ、なんか疲れるわ、あの人」

「そうですか？ 私は特に何も」

神華の視線は、沙夜が手を付けていない饅頭に向けられている。

「あ、どぞ。私はいらないので」

それに気付いて、沙夜はあっさりと饅頭を彼女に渡した。神華はとても嬉しそうである。

「あらまあ、沙夜ちゃんはやっぱいい子ですね」

「そんなに食って、太るわよ」

「大丈夫ですよ。由紀子さんと違って、お腹には溜まりませんから」
「腹のことは言うな！ てか、なんで知っているのよ？！」

お腹の肉のことは、由紀子にとってはタブーである。誰にも話したことはないことなのに、それを知っている神華とは一体何者なのか。侮りがたし、神華。

「つぶさに観察していれば、大抵の事は見えてくるものです」

にやりと笑う神華の顔が、悪魔の笑みのように見えた。

「じっくり観察されているモルモットの気分が、今分かった気がした」

げんなりと呟く由紀子に、苦笑する沙夜。そんな話をしていると、

水及が部屋に戻ってきた。

「さて、話がまとまりました。今から、橘家に向かってください」

「橘家に？　うわ、櫻町縦断……」

歌宝山は、櫻町の北。橘家は、櫻町の南に位置する。まさに櫻町の縦断であつた。

「狼命に車を出させます。安心してください」

「なにからなにまで、ありがとうございます」

沙夜の言葉に、水及は笑顔を浮かべる。

「気になさらないで。ただ、これだけは忠告しておきます。沙夜さんの能力は、非常に危険です。一度封印したら、二度と使わないことをお勧めいたします。あなたの力は、利用価値が高い。よこしまな輩を近づけないためにも……くれぐれも他言無用です」

最後の言葉は、神華と由紀子に向けられた。二人は静かに頷いた。

「もし、何かあればまた私を訪ねてください」

「はい、本当にありがとうございます」

深々と頭を下げ、由紀子達は山を降りた。

第六話 沙夜の能力を封印しましょう 後編（前書き）

霊媒の能力を有する氷女沙夜。かつて同じ能力を有していたサトリという人が、『水及』と呼ばれる山神の巫女に、能力を制御してもらう術を授かっていた事を知った沙夜は、由紀子と神華と共に歌宝山を目指した。そこで水及と会うことが出来たが、どうやらサトリと沙夜では、条件が違いうらしく、制御する方法を教えられないとのこと。もう一つの方法を得るために、三人は橘家へと目指すこととなった。

第六話 沙夜の能力を封印しよう 後編

神華は、用事があると帰ってしまった。そのため、由紀子と沙夜だけで橘家へと向かった。水及が車を出す——というから、どんな車かと思えば、なんと軽トラック。あまりのギャップに驚いていたが、狼命曰く、『主の実益と嗜好の産物だ』とのこと。確かに、水及一人乗せるには問題ないし、荷物もたくさん乗る。税金も安いし、車検代だって安い。言っていることは、確かによく分かる。だが、納得がちつともいかない由紀子だった。

乗り心地は最悪だった。櫻町の道は、もう本当に谷あり山あり。一体、いつから舗装されていないんだ？ というぐらいに、道が荒れていた。なので、車がよく跳ねる。車が跳ねれば、由紀子たちも跳ねる。そして、尻を打つ。踏んだり蹴ったりである。

車でおよそ十五分程度の行程を追え、ようやく軽トラックは目的地である橘家が管理する橘神社の、石段の下にたどり着いた。

「ありがとうございます」

由紀子と沙夜が礼を言うも、狼命は何も答えずに帰っていつてしまった。なんとも付き合いの悪い男である。

橘神社。櫻町に古くからある神社であるが、住民に慕われている御櫻神社と違い、ほとんど誰も近づかないそんな神社である。由紀子は、この橘神社を管理している橘家が行っている本当の家業を知っている。

『除霊屋』。魔や妖を払う仕事。由紀子の友達である椿もまた、その仕事に従事しており、彼女が高校へと進学しなかったのも、仕事に専念するためであった。

長い石段を超え、息絶え絶えで境内にたどり着いた、由紀子と沙夜。境内では、椿が彼女達を待っていた。

「あ、来ましたね。お疲れ様です、由紀子さん。それに、初めまして。橘椿です」

仕事着の巫女装束を身に纏った椿。おしとやかに頭を下げる。

「は、はじめまして。氷女沙夜です。よろしくお願いいたします」
緊張している沙夜は、深々と頭を下げていた。

「ども・・・椿さん、はあ、シンドイ。あの石段、減らせないの？」

「それは無理ですよ。ダイエツトになつて、丁度いいでしょ？」

「だから、太つてない、て。皆が痩せすぎか、絞りすぎなのよ」

椿は、嘆息を吐く。

「運動をしてください。由紀子さんの不摂生振りは、目に余ります。氷女さん。由紀子さんと付き合うのは別に構いませんが、彼女に引きずられて同じ生活をしないように。出来るならば、首に輪でも付けて外に引きずり出してください」

「あ、はい！ 気をつけます！」

沙夜は、かしこまってそんな返事をしていた。

椿に案内され、神社の裏の母屋へと通される。母屋は、古い木造建築。江戸時代にも迷い込んだような錯覚を抱かせるような、そんな建物である。

木張りの廊下を、椿に付いて歩く。すると、反対側から一人の少女が歩いてきた。年の頃は、沙夜と同じぐらいか。髪型は、ポニール。瞳は鋭くて、野犬のよう。桜色の美しい着物を身に纏った彼女の事を、由紀子は知っていた。

橘櫻。椿の妹である。

「・・・櫻、お客様よ」

歩みを止めて、椿が声をかける。櫻は、頭を軽く下げていた。由紀子は、黙っている。どうもこの櫻という子は苦手なのだ。話さないなら、話さないことに越した事はない。由紀子は、彼女と言葉を交わす気は最初からなかった。

「こんにちは。お邪魔しています」

礼儀正しい沙夜は、ちゃんと頭を下げていた。そして――。

「どうして・・・お兄ちゃん・・・どうして・・・」

「えっ？ 沙夜ちゃん？」

突然、沙夜が意味不明なことを口走った。沙夜の瞳は、櫻に集中していた。瞬き一つしていない。完全に硬直している。その彼女の額から、つうと血が流れてきた。なにも、そこには傷が無かったにも関わらず。

櫻が動いた。切羽詰った表情で踏み込んでくる。突き出した右手は、沙夜の首を狙っているようだった。

「やめなさい、櫻！」

その手が届く前に、椿によって止められた。櫻はしばらく沙夜を睨んでいたが、諦めたのか力を抜いた。

「申し訳ありません。手を離してもらえますか？」

「あ、ごめんなさい」

椿が手を離すと、櫻は踵を返して来た道を戻っていつてしまった。

「大丈夫ですか、氷女さん」

椿はハンカチを取り出し、沙夜の額から流れた血を拭う。

「どうということなの椿さん？」

椿は難しい顔をしていた。

「あの子の過去を見てしまったようね。体験したことが肉体にまで影響が及ぶなんて、とんでもない力だね。これが、サトリの力」

椿は、サトリの力がどういうものか、正しく知っているようである。沙夜は、『霊媒』だと言っていたが、他者の過去を見ることも『霊媒』だと言えるのか。由紀子は、すぐに『NO』という答えを導き出す。それは、もっと違う異質な力だ。サトリ。その名前が意味する能力。由紀子は、感じてしまった。沙夜が隠している、もう一つの力のことに

「あ・・・私・・・？」

そこで沙夜が正気に戻った。戸惑っている彼女に、椿はゆっくりと優しい声音で話しかけた。

「大丈夫。ちょっとした事故よ」

「事故・・・？ 違う。私、また・・・人の心を・・・！」

「落ち着いて。大丈夫だから」

椿の言葉は入っていない。沙夜は、怯えきっていた。

「私を殺して……！ もう……殺して……！ どうして？ やつと私……」

沙夜は、遂に座り込んで泣き始めた。『やつと私……。』。その言葉の後に、何が言いたかったのだろうか。由紀子には、なんとなくだが彼女の言いたかった事が分かっていった。だから――。

「行こう」

手を差し伸べる。言葉は、紡げば紡ぐほど嘘になる。大切なのは、由紀子の今の気持ちを示す行動である。

沙夜は、しばらく由紀子の顔を見上げていた。

由紀子は、微笑んでみせる。安心しなさい。私は、あなたの味方である――と。

涙を拭う沙夜。由紀子の手を取り、立ち上がった。ぎゅっと力強く握ってくる沙夜の小さな手を、由紀子は握り返した。椿も、ほっとしたようだ。

沙夜と由紀子は、母屋の一番奥に案内された。

「当主、お連れいたしました」

「中へ」

椿が中に伺いを立てると、渋い声が返ってきた。

中へと通される。室内は、水及の部屋に比べたらとても狭い。六畳程度ではなからうか。しかし、部屋に置いてあるものは非常に似ていた。これでは、水及の部屋のミニチュア版である。ただ違うのは、水及が座っていた場所に、強面の渋い白髪の老人が座っていることぐらいであろう。

橘勝彦。椿の祖父であり、橘家の当主である。

「椿は、下がれ」

「あ、はい。分かりました」

戸惑いつつも、椿は部屋を出て行く。残された沙夜と由紀子は、緊張した面持ちで老人の前に座った。

「ご無沙汰しております」

由紀子は、かしこまった口調で挨拶をする。

「元気そうだな。そちらが、氷女沙夜殿か」

「あ、はい」

緊張する沙夜に、勝彦は少し柔らかい表情を浮かべて見せた。

「硬くならなくていい。私は、この橘家の当主をしている勝彦だ。話は、水及様から聞いている」

由紀子は、少し驚いていた。勝彦まで、水及を『様』を付けて呼ぶ。さすがに由紀子も勝彦がどれだけ偉いのかは把握しきれないが、警察も役人も口出しできないことぐらいは知っていた。その彼が、『様』を付けるほどの相手だという事なのだろう。

勝彦は、早速とばかりに古びた木箱を沙夜の前に置き、その蓋を開けた。中には、青い色の玉で作られた美しい数珠が収められていた。

「『鎮めの契り』だ。君の力が外に出なくする、『堰』の代わりになるものだと思うてくれればいい」

沙夜は、恐る恐る鎮めの契りを手に取った。その瞬間、沙夜の表情が急変。困惑した表情を勝彦に向けた。

「こ、こんな大事なものの私もらえませんか！」

「・・・感じてしまわれたか」

「どうということ？」

沙夜は、泣きそうな顔を由紀子に向けた。

「これ・・・さきほどの椿さんの・・・お父さんの形見・・・です」

「えっ？　じゃ、椿さんを払ったのって・・・」

由紀子も感じていた。なぜ椿を払うのか。彼女も十分状況を把握しているのだから、この場においても不思議はない。由紀子はむしろ、当然だと思っていた。

「椿には、父親の死について詳しくは話していない。もしかと思って、出てもらったのだ」

勝彦は、一旦言葉を切って座りなおした。

「確かにその鎮めの契りは、私の息子である一哉の能力を封印する

ために水及様がお作りになったものだ。だが、それは君が背負う必要のないものだ。一哉の妻も君にそれを渡すことを承認している。なぜだか分かるか？」

首を横に振る沙夜に、勝彦は厳かに微笑む。

「一哉なら、そうするからだ。受け取ってほしい」

しばらく悩んだ後、沙夜は鎮めの契りを左の腕に付けた。

「椿には内緒にしておいてくれ。あの子に語るには、私の覚悟の方が足りないものでな」

勝彦は苦笑していた。

「で、効果の程はどうなの？」

橘神社を後にし、石段を降りきったところで、由紀子はそう聞いた。しかし、実の所は沙夜が嬉しそうにしているのを見ただけで、効果は絶大であったことが窺えていた。

「世界が、違うように思えます。こんなにも世界は静かだったんですね」

彼女に込められた思いは、底知れない。

「そっか。これで万事解決ね。良かったあー！」

大きく伸びをする由紀子。沙夜も笑顔でそんな由紀子を見つめていたが、ずっとその表情を引き締めて、橘神社を見上げた。

「・・・あの子のこと、気になるの？」

「分かりません。でも・・・そうかもしれません」

曖昧な言葉を残す、沙夜。彼女にもよく分かっているようにうた。

鎮めの契り。それは、きっと沙夜の生活を変えてくれる。彼女の表情が、もっと明るくなる事を望む、由紀子であった。

机の上で眠っていた水及は、帰って来た狼命の足音で目を覚ました。

「いま、帰りました」

「ご苦労」

水及は、体を起こして、どこかいたずらっぽく微笑む。

「で、彼女とは何かお話ししたのか？」

「いいえ。彼女は、サトリ様とは違います」

「条件は同じだ。また、折角のチャンスを不意にするつもりか？」

「お言葉の意味が分かりません」

狼命は、きつぱりとそう言った。相変わらずの彼の態度に、水及は溜息を吐いていた。

「そうか。相変わらず、つまらぬ男だな、お前も」

「それよりも、橘家から依頼されていた例の件、なにも調べなくて宜しかったのですか？」

「ああ、さきほどちらりと見たが、私の封印は問題なく稼動していた。ちょっとした、フラッシュバックに過ぎない。無理やり頭を抑えているんだ。そんなこともある。気を遣いすぎだ」

水及はなんでもないと笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462e/>

由紀子・夏樹編 改訂版

2010年10月8日15時15分発行